千葉・茨城地区 馬のあゆみ 下

千葉・茨城地区

軽種馬関連施設

■(社)日本軽種馬協会下総種馬場

昭和37年(1962)、成田市三里塚に新設された同協会最初の直営種馬場。三里塚種馬場の名で地域に親しまれたが、新東京国際空港建設等により移転を余儀なくされ、昭和45年(1970)富里町に移転。名称も下総種馬場と改称し現在に至っている。●千葉県印旛郡富里町御料257☎0476-93-1084

■日本中央競馬会美浦トレーニング・センター

東京ディズニーランドの約4倍の広さをもつ関東地区のトレーニング・センター。センター内では、施設見学会や馬に親しむイベントも開催されている。●茨城県稲敷郡美浦村大字美駒2500-2☎0298-85-2111

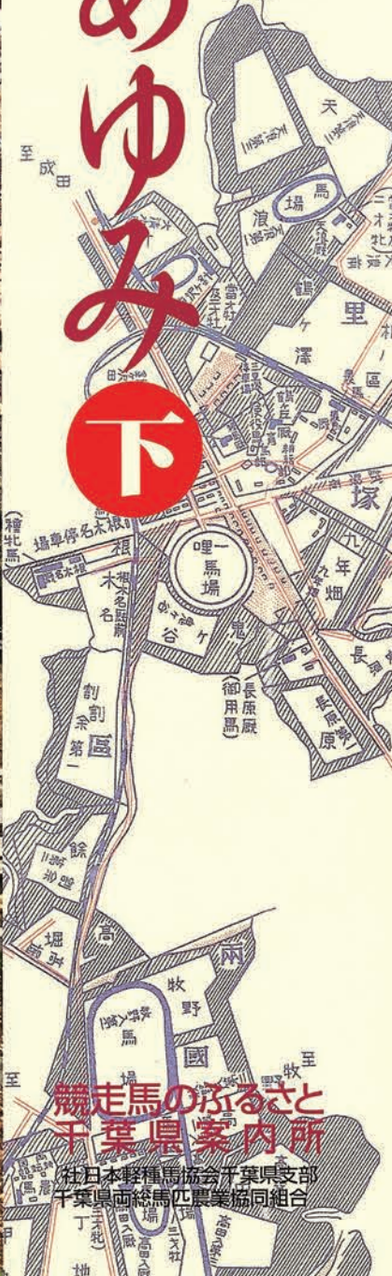
■日本中央競馬会競馬学校

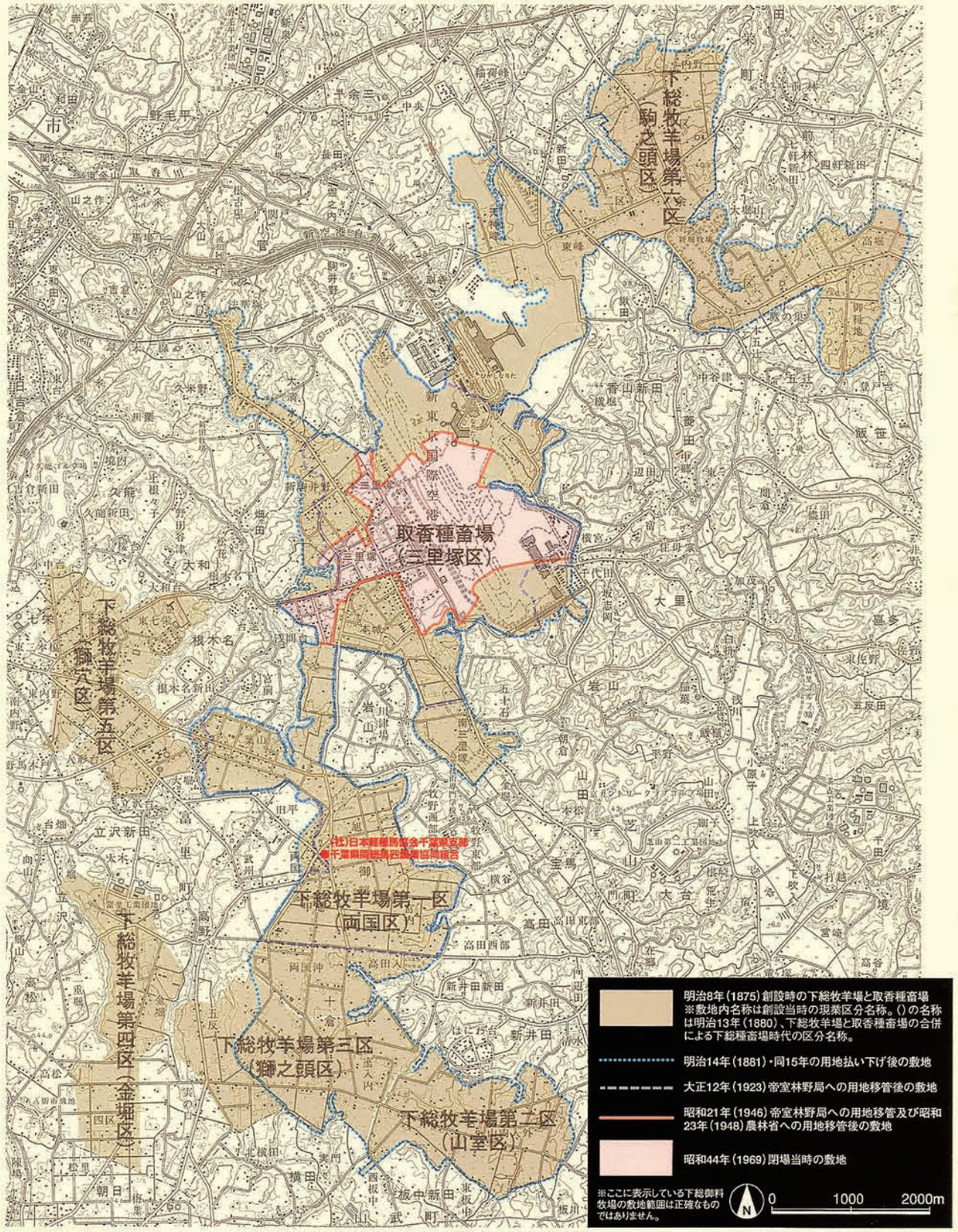
昭和57年(1982)に日本中央競馬会本部の付属機関として設立された騎手・きゅう務員の養成学校。全寮制で教育期間は騎手課程3年、きゅう務員課程6カ月。きゅう務員課程の応募資格は中学卒業以上の学歴をもつ入学時28歳未満、体重60kg以下の者で、筆記・実技などの試験に合格することが入学の条件となる。●千葉県印旛郡白井町根835-1☎047-491-0333

競走馬のふるさと千葉県案内所

〒286-0212 千葉県印旛郡富里町十倉1番地
千葉県両総馬匹農業協同組合内
TEL(0476)93-1008　FAX(0476)92-2985

■開館日／9時～16時（土曜12時）
■休館日／日曜・祝日、年末年始
※8月に不定休館あり





本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号　平11関複、第512号)

■創設当時の下総御料牧場／下総御料牧場は「佐倉七牧」と呼ばれた幕府直轄の馬の牧場のひとつ、取香牧(とっこうまき)を中心とする上総(かずさ)、下総(しもうさ)、ふたつの旧国名の台地に創設された。開設当初の総面積は約3,000町歩(約2,900ha)。現在の成田市、富里町、山武町、大栄町の1市3町にまたがる広大な面積をもち、後に下総御料牧場と改称される下総牧羊場と取香種畜場で構成されていた。このうち、下総牧羊場は事務と現業の2部門に分けられ、現業は上図のように6つに区分され、各区に技監1人、雇い人2人の管理体制が敷かれていた。

高速道路がまちを至近距離で結び、航空路線が世界とネットワーク網をつくる日本の中枢地域・関東。世界と肩を並べるまでに成長を遂げたこの地域の歴史の基部には、交通・開墾・農耕の原動力となり、都市発展の基盤づくりに貢献した数多くの馬たちがいたことを忘れることはできません。

関東最大の馬産地に語り継がれる優駿の軌跡。

下

本誌では、関東最大の馬産地、千葉・茨城地区のそんな馬との関わり、名馬輩出の軌跡など、明治から現在にいたる歴史経過を「馬のあゆみ・上巻」の続編として9つのテーマで紹介しています。古代から明治以前までを紹介している上巻とともにご利用ください。

御料牧場

明治の気骨が下総台地に馬産の礎を根づかせた。

広大な原野に築かれた殖産興業政策の拠点施設。

維新直後、国内には牛馬の飼養はあったが、畜産業といえるほどの経営はなく、また家畜も欧米諸国とは比較にならないほど資質が劣っていたという。

この状況を改善すべく、明治政府は国内家畜の改良を図る畜産政策を推進。外国から優良種畜の輸入を開始した。後に下総御料牧場と改称する下総牧羊場、取香種畜場は、こうした畜産政策の基地として、明治8年(1875)に現在の成田市三里塚を中心とする地域に創設された。

当初、羊毛の生産を見込んだ羊の飼育繁殖を主体に、牛、豚などの改良が進められたが、害虫や伝染病などにより、これらは当初の計画通りに事業は進展しなかったといわれる。しかし、馬の改良については創設された地域がもともと幕府直轄牧の地であり、当時は繁殖・飼養の知識をもつ人も多かったことから、馬の改良・繁殖は順調な経過をたどった。

取香種畜場では、輸入した純粋種の繁殖を行いながら、輸入種牡馬と国内牝馬を交配。国内産馬の改良種に努めるとともに、それまで牛が主体だった農耕を大型農機具を付けた農用馬で実践するなど、それまでにない先進的な試みをいくつも実施していった。

旧御料牧場事務所(現成田市三里塚御料牧場記念館)

■獣医師の養成

下総牧羊場の御雇い外国人(※1)リチャード・ケーは、各地からやってきた獣医生徒に家畜衛生・飼養管理の指導を行っていたが、これが口コミで広まり、全国から講義受講希望者が殺到した。そこで明治13年(1880)に「変則獣医術学制」がつくられ、本格的な獣医教育がスタートされた。教育期間は2年だったが、ここで学んだ優秀な生徒たちは全国に巣立ち、日本の畜産業に大きな貢献を果たしていった。

下総御料牧場のサラブレッド放牧風景(下総御料牧場史より)

■御料牧場の変遷

明治13年(1880)、下総牧羊場と取香種畜場は併合され下総種畜場に改称。大正11年(1922)に宮内省下総牧場となるが、昭和17年(1942)に下総御料牧場に改められた。昭和44年(1969)、新東京国際空港建設により、牧場は94年の歴史を刻んだ三里塚を離れ、栃木県高根沢に移転。現在に至っている。

ダイオライト記念碑(成田市三里塚御料牧場記念公園内)

トウルヌソル(下総御料牧場史)

鐵道
民家
家屋
土堤
道路
山林
貸地
至駒場
至成田
至佐倉
至芝山
至牧野
至八街
至猪之頭
至猪之頭
田高至
野高至
馬場
牧野
國
高
田
甲地
丁地
馬場
馬場
馬場
一哩馬場
長原厩
(御用馬)
長原牧
長原
年畑
塚
宮
宮
育牛部
芝
里
組一区
割割区第一
葉
山
堀
根
木
三
矢
浪
針
澤
谷
根
木名
根
木名
(種牡馬)
(種牝馬)
(役馬)
(種牛)
(種牛)
(種牛

開墾・輸送・交通手段として
馬は地域発展に馬力を尽くした。

下総御料牧場で使われていた大型農耕機具（宮内省御料牧場所蔵）

農耕・交通・輸送の動力へ。馬はまちの発展に貢献した。

明治時代の農家にとって、馬は厩肥をもたらす貴重な存在であった。このため、明治12年（1879）頃より取香種畜場で「預け馬制度（※3）」が始まると、馬を飼養希望する農家が急増。こうして地域に馬の生産が浸透し、馬耕、馬車、軍馬など、産業としての馬産が根付くとともに、蹄鉄工や博労など、馬を扱う職人も増えていった。

原野に誕生した集落に地域文化が芽生えていった。

下総牧羊場・取香種畜場が開設された当時の一帯は見渡す限りの原野であり、牧場では飼料や物資購入に不便だった。そこで、下総牧羊場第一区と第二区、取香種畜場の一部に限って住民の居住を認め、周囲の開墾や交通路発達を促進することにした。これにより牧場の周囲に民家が建ちはじめたが、特に、成田と芝山を結ぶ現在の富里町三里塚地区は、交通便の良さもあり、すぐに集落が誕生したという。また、こうして定住、出店した人のなかから、道を往来する者を大風や冬の寒さから守るための植樹が牧場に願い出されたといい、これにより三里塚の道筋に桜が植えられていった。後に「桜と馬の三里塚」として名所にもなっていくこの桜並木だが、現在はその姿をとどめていない。

高村光太郎「春駒」歌碑（成田市三里塚御料牧場記念公園内）

■三里塚を愛した文人たち
明治末期の文壇で活躍した水野葉舟をはじめ、窪田空穂、高村光太郎など多くの文人がこの地を訪れ、世に「桜と馬の三里塚」を紹介した。なかでも当時の御料牧場を表現した高村光太郎の「春駒」は、当時の様子を知ることのできる貴重な資料にもなっている。

大正2年の三里塚十字路「三里塚郵便局」（成田市立図書館所蔵）

■成田山新勝寺と芝山仁王尊観音教寺
三里塚地区は、このふたつの寺への往来筋であったことが発展の要因でもある。成田山新勝寺には絵馬類をはじめ、地域の馬文化を記す貴重な資料を数多く所蔵。また、芝山仁王尊観音教寺には、古代の馬産を示すはにわの施設や名馬・吾妻号の記念碑などがあり、今日の馬産の歴史を知る上で欠かせない存在となっている。

成田山新勝寺

桜と馬の三里塚

宮内省下総牧場調教用楕円形馬場・直線馬場見取図（昭和16年日本競馬會発行「宮内省下総牧場における競走馬の育成調教」より）

■三里塚の馬見場（ばけんじょう）
明治天皇が御料牧場へ行幸されたときに放牧馬を眺められた高さ2mほどの土手が馬見場。当時、この土手には馬場（※4）が隣接し、明治天皇はここで競馬もご覧になったという。また、昭和初期には、この馬場で付近の民間牧場が自慢の馬をもちより、花見がてらの草競馬が行われたといい、近隣の多くの人が見物に訪れたという。

※3.預け馬制度／馬の頭数増加により取香種畜場の畜舎が不足したため、種付済み国内牝馬を一般農家に預託した制度。月1回牧場で検査を行い、受胎が確認された牝馬は出産予定3カ月前に牧場へ戻させる制度であった。

※4.馬見場の馬場／明治天皇の行幸の際、放牧馬をみるために築いた1マイル（1,609m）ほどの馬場で、中は放牧地。草競馬が行われていた時代、この馬場は「一哩（マイル）馬場」と呼ばれていた。

民間牧場

民間牧場の出現によって競走馬生産は隆盛を極めていく。

下総御料牧場のせり風景（御料牧場所蔵）

御料牧場の経営改善が民間牧場を育んでいった。

明治政府は当初から欧米諸国並みの国内畜産業の発展を掲げていた。しかし、民間企業の進展が計画通りに運ばない状況から、明治13年（1880）、太政官は内務省に対し官営企業の改革を通達する。下総種畜場では、この通達に沿って西側の用地と、農用馬、農機具などの払い下げを決定。さらに、宮内省に移管された明治19年（1886）には改良の遅い在来馬全てを民間に払い下げ、畜産事業は定数の家畜飼養とし、馬など余剰生産の部分は民間に売却。その売却益によって牧場を維持・運営する「独立採算制」をとっていくようになる。

こうして官営事業が縮小されるなか、国や県に後押しされた民間企業は次第に力をつけ、地域に根を張っていった。

また、馬券を発売しての競馬が行われた明治21年（1888）以降、民間牧場設立の気運も高まりをみせ、3年後の明治24年（1891）には民間で最初のサラブレッド生産（※5）を開始する小岩井農場が創設。下総台地でも明治39年（1906）に菅井農場（現菅井牧場）、大正15年（1926）に新堀牧場（現シンボリ牧場）が開設され、その後、若草牧場、社臺牧場（現社台ファーム）、新田牧場、大東牧場、東牧場、下河辺牧場、扶桑牧場など、現在も優駿を輩出し続ける著名な牧場が次々と誕生していった。

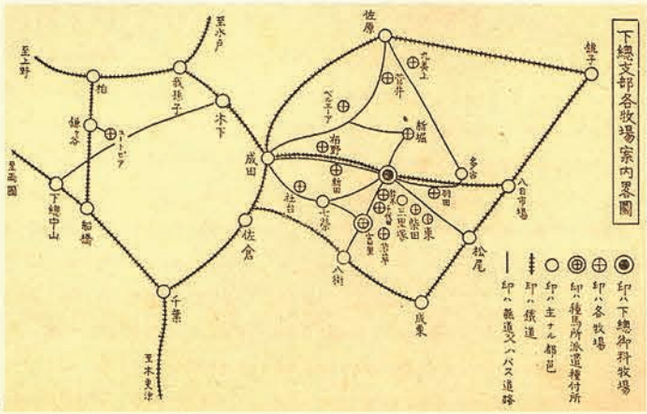
■御料牧場の売却頭数（大正元～14年）

14年	13年	12年	11年	10年	9年	8年	7年	6年	5年	4年	3年	2年	元年（大正）	年度／種別
2		7	10	3	7	19	20	17	6	11	5	5	8	サラブレッド種
3	2	22	81	39	28	25	14	25	21	5	3	12	4	アングロアラブ種
										1				アラブ種
										6	1	5	5	オーロフロストブチン種
	2	10	42	18	6	13	22	18	22	18	6	7	6	ハクニー種
		5	18	12	5	7	8	10	12	11	5	4	4	トロッター種
			4		1			1						ブラバンソン種
	5	18	37	18	11	16	18	15	15	21	10	12	18	洋種
3	13	12	11	3	4	4	2	9	11	17	4	8	15	雑種
8	22	74	203	93	62	84	84	95	87	90	34	53	60	計

宮内庁発行「下総御料牧場史」より

■小岩井農場の軌跡

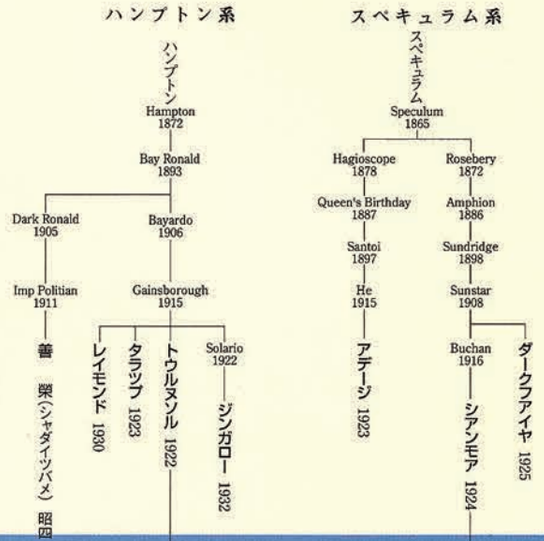
日本鉄道会社副社長・小野義眞（ぎしん）、三菱会社社長・岩崎弥之助（やのすけ）、鉄道局長官・井上勝（まさる）の三氏の頭文字をとって命名された岩手県の農場。先進的農業技術を導入し、軽種馬生産の偉大な足跡を残すが、その後、農場は経営破綻してしまう。後に乳牛種畜の生産を主業務に再建され、現在にいたる。



昭和17年の日本競走馬生産者協會下総支部案内図（千葉県両総馬匹農協所蔵）

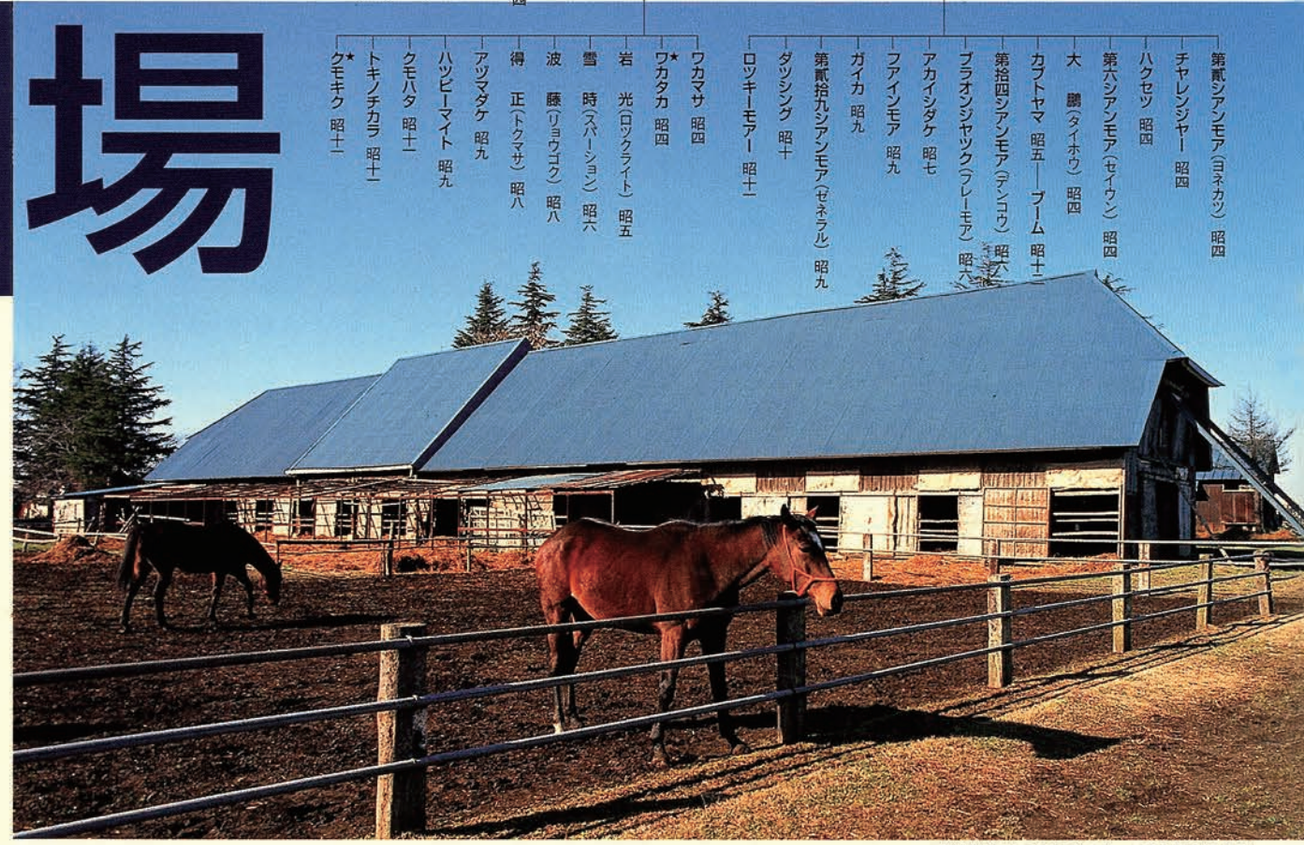
戦前の競馬を席巻した官と民の優駿たち。

下総御料牧場は昭和6年（1931）と翌7年（1932）に、サラブレッド繁殖牝馬（※6）6頭を米国から輸入している。これら牝馬は小岩井農場の牝馬とともに繁殖成績に優れ、両牧場は戦前の競馬を沸かせるとともに、交配・せりなどによって数多くの優良産駒が民間に導入されていった。昭和15年（1940）の売却頭数を見ても、下総16頭505,700円、小岩井16頭414,570円と、他を圧倒する人気を誇っている。



■牡系系統表

日本競馬會発行「サラブレッド系統種牡馬名簿」第一巻に記載された下総御料牧場導入のサラブレッド種牡馬トウルヌソル（左）と、小岩井農場が輸入したサラブレッド種牡馬シアンモア（右）の系統図。※★印はサラブレッド系種



下総御料牧場の面影を残す唯一の厩舎（現扶桑牧場）

※5.民間で最初のサラブレッド生産／小岩井農場のサラブレッド生産は、イギリスから繁殖牝馬20頭を輸入した明治40年（1907）から。この当時に輸入された牝馬は名牝ぞろいで、五冠馬シンザンをはじめ、菊花賞馬マチカネフクキタルなど、現在まで優秀な子孫を伝えている。

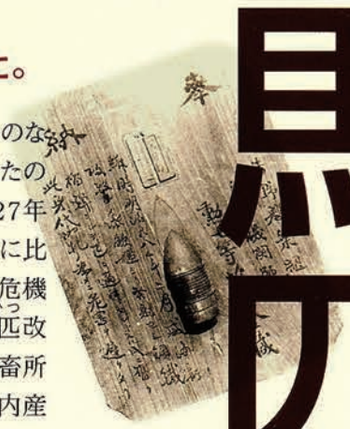
※6.下総御料牧場の輸入牝馬／昭和6年（1931）に星友、星若、星旗の3頭、翌7年に星浜、星谷、星富の3頭を輸入。このうち星友はトウルヌソルと交配。その産駒ヒサトモは第6回東京優駿競走優勝馬であり、その血統は後のトウカイテイオーに受け継がれる。

国防のための馬匹改良が馬の大型化に拍車をかけた。

馬匹改良

国防としての馬匹改良は日清戦争が発端となった。

明治初頭より進められた畜産改良のなかで、馬の改良・増殖を熱心に進めたのが帝国陸軍であった。特に、明治27年(1894)の日清戦争で対戦国の軍馬に比べて資質が劣る国内産馬の状況に危機感をもった軍は、富国強兵のもと、馬匹(ばひつ)改良計画を強力に推進。種馬牧場、種畜所を開設して多くの外国馬を輸入、国内産馬の改良繁殖を行うとともに、質の良い民間牧場の馬を積極的に購入していった。

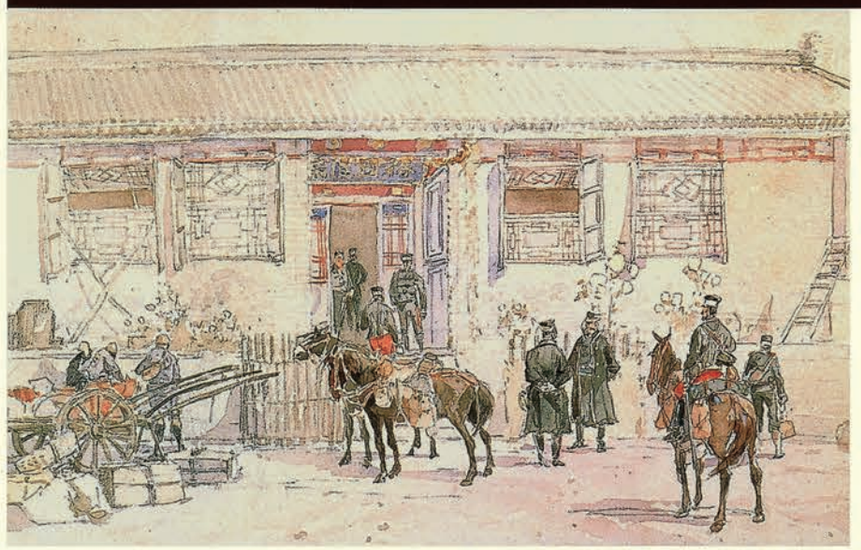


日清戦争身代わり札
霊験の額
(成田市立図書館所蔵)

■軍馬の資格
明治36年(1903)、陸軍は農商務省に対し馬匹改良の希望を申し入れた。このなかで軍馬の資格条件として、性質柔順で体格強固、粗食に耐え持久力に優れた馬であることを基本に、乗用馬・輓用馬の馬体高、体重などが詳細に決められていた。

農馬	軽種	アラブ、サラブレッド、アングロアラブ、アラブ系種、サラブレッド系種
	中間種	アングロノルマン、アングロノルマン系種、軽半血種、中半血種、重半血種
	重種	ペルシュロン、ペルシュロン系種、重系種
	在来種	木曽馬、北海道和種、その他
輓馬	中間種	アングロノルマン、アングロノルマン系種、中半血種、重半血種
	重種	ペルシュロン、ペルシュロン系種、重系種
乗馬	軽種	アラブ、サラブレッド、アングロアラブ、アラブ系種、サラブレッド系種
	中間種	アングロノルマン、アングロノルマン系種、軽半血種、中半血種

■戦後の馬匹の用途と種類
大陸作戦には50万頭の軍馬が徴用されたといわれるが、優良馬から徴用されたため、太平洋戦争時には資質の低いものしか残らなかったという。戦後の昭和26年(1951)、祖国再建のため、左記のような馬匹改良の生産方針が打ち出されていく。



雉子窩(ひしか)第二軍司令部(浅井忠画・千葉県立美術館所蔵)

■鍛錬馬競走
昭和14年(1939)に施行された軍馬資源保護法では、当歳馬、明け18歳以上の馬、官営所有馬、種馬統制法に指定された馬以外は、軍馬としての鍛錬と馴致(じゅんち)が義務づけられた。また、鍛錬・馴致後には、鍛錬競技で能力と馴致が審査されていた。

鍛錬競技には一般鍛錬競技と鍛錬馬競走があり、一般鍛錬競技は乗馬、輓馬(ばんば)、駄馬(だば)の3つの競技で馬体・調教・能力が審査されていた。また、鍛錬馬競走は優等馬票の発行(※7)が認められた公認競馬で、地方競馬を継承したもの。当時、千葉県では千葉県畜産組合により、柏で開催されていた。

※7.優等馬票／馬券のこと。鍛錬馬競走開始以前の地方競馬では、優勝馬投票権付入場券は1円で、現金の払い戻しは禁止されていたが、この鍛錬馬競走の券面金額は3円で払戻金も支払われていた。このことからも、この当時の軍馬がいかに優遇されていたかがわかる。

軍馬の需要によって馬の生産農家が拡大した。

軍馬資源保護法(鍛錬馬競走参照)の指定を受けた馬の飼養者には、当時飼養補助金が交付されていた。戦中の貧しい生活のなか、農家にとってこの収入は貴重であり、また、飼養馬が軍に徴用されることは、当時大変名誉なことでもあった。

昭和17年(1942)には軍用馬補充の円滑化を図るため、馬の最高販売価格が指定されたが、これによると、3歳の優良種牝馬の最高販売価格は1,000円、同2歳馬は810円であった。当時、米一俵(60kg)の値段は18円前後であることから、この価格がいかに高額であったかがわかる。

厩(うまや)をもつ当時の農家(千葉県立房総のむら)

戦中・戦後の混迷期牧場存続の危機が襲う。

昭和19年(1944)、戦争激化により、ついに国内での競馬開催が中止となった。軍馬生産などでかろうじて牧場運営を続けてきた千葉・茨城近郊の牧場(※8)も、徴兵による人手不足と食糧難により急速にその数が減り、残った牧場も閉鎖、または馬を他に預けざるを得ない、馬産地として厳しい選択を迫られることになった。

※8.千葉・茨城近郊の牧場／昭和19年(1944)、下総御料牧場の売却成績は洋種・雑種合わせて23頭(一頭平均額7,244円)が記録されている。しかし、この当時の民間牧場の飼養戸数、頭数などの詳細は、軍事機密上明らかにされていなかった。

日本競走馬生産者協會下総支部繋養種牝馬(昭和17年1月現在)

■九美上牧場／沖ツ風(サラ)、アリアデ(サラ)、波友(サラ)、ロツキーパーク(サラ)、アデレイド(サラ)**■菅井農場**／朝宗(サラ)、ワカイワヰ(サラ)、第一スタートンベルノ三(サラ)、イワイセカンド(サラ)、エルクハート(サラ)、マサモト(サラ系)、イワヰブネ(サラ)、祝福(サラ)**■新堀牧場**／フアントムシンニー(サラ)、スリリング(サラ)、マルベリー(サラ)、デスモンドホリデイ(サラ)、八洲(サラ)、レイコウ(サラ)、比叡(サラ)、瑞兆(サラ)、大鈴(サラ)、パープルフツド(サラ)**■山倉五三郎**／水光(サラ)、正高(準サラ)、若武(準サラ)**■秋葉太吉**／青嵐(準サラ)、フリヂデイテイー(サラ)**■吉田芳平**／久扇(準サラ)**■飯田武**／紅玉(サラ系)**■ベルエーア牧場**／フリツターサン(サラ)、サンスクリツト(サラ)、スターダスト(サラ)、クルシーナ(サラ)、スピニングジエニー(サラ)、第二マンナ(サラ)、イチフジ(サラ)、アートフルノー(サラ)**■新田牧場**／ササセカンド(サラ)、ブローグ(サラ)、ジヤデニアー(サラ)、コクサイ(サラ)、ラグレシア(サラ)、クインジヤデニアー(サラ)、ユーターピーノー(サラ)**■羽田牧場**／英道(サラ)、英光(サラ)、セレタ(サラ)、ホワツタークライム(サラ)、テイフイン(サラ)、プレテイークライム(サラ)、サブライズ(サラ)**■東牧場**／第三ツイヒナ(準サラ)、第四パシフイツク(サラ)、久谷(サラ)、鶴藤(サラ)**■布野皓三**／レポンデア(サラ)、ダンロビン(サラ)、ダブランダ(サラ)、レプリカ(サラ)、フーズザレデー(サラ)、ボウノツタ(サラ)**■柴田侃**／久寳(サラ)、バウアースメリー(サラ)、久鶴(準サラ)、リントパーク(軽半)、乙姫(軽半)、バウアーストツク(サラ)、ウイスカツプ(サラ)、カワカゼ(サラ)、黄金タンポポ(サラ)、第四デツトインデアン(サラ)**■山崎林治郎**／軍風(サラ)**■黒川亮太**／初姫(アア)**■河野豊信**／フアストピーヤ(準サラ)、マイアミー(サラ)**■橋本新兵衛**／ブルーム(準サラ)**■江原義三**／ミングル(サラ)**■若草牧場**／シヤインモア(サラ)、第五パシフイツク(サラ)、第三アストラガル(サラ)、第三オーグメント(サラ)、サクラメント(サラ)、朝高(準サラ)、メリーチヤペル(サラ系)**■林田弘**／第三ミスナン(サラ)**■鈴木儀重**／ホイスリング(サラ)、ゼシホールド(準サラ)**■増田惣吉**／ハクラン(準サラ)**■浅沼幸太郎**／イワスミ(準サラ)**■秋元常次郎**／國富(準サラ)**■山田齋知**／エルムパイン(サラ)、マツイワヰ(準サラ)**■飯沼松之進**／ミサト(準サラ)**■加藤清**／アントルスミス(サラ)、第二ハンシン(サラ)**■伊藤明**／コヒメ(サラ)**■鈴木松太郎**／神嵐(準サラ)、雲富(サラ)、久忠(サラ系)、ヤングスター(サラ系)、勾玉(サラ系)、マテイルダー(軽半)、鶴錦(サラ)、越帛(サラ)、君風(サラ)、第一ラブトン(サラ)、雪元(準サラ)、エンゼルクイツケロ(サラ)、セントフラスキン(サラ系)、モスクエトン(サラ)**■千代田牧場**／鶴重(準サラ)、勝正(準サラ)、第五春海(サラ系)、ワイルドフルート(サラ)、ブラツクハギー(サラ)、エレクトリツクローズ(サラ)、セオシヨウ(サラ)**■中村昇**／グリーンライト(サラ)**■内田庸**／ハクイサミ(準サラ)**■麻生穣**／ヒノデ(サラ)**■萩原愛治**／パテイーブラウン(サラ系)**■ユートピア牧場**／エミール(サラ)、ミスカントツク(サラ)、ビデイスキヤリジヤー(サラ)、メリーユートピア(サラ)、エミレツト(サラ)、ベバーストン(サラ)、エミカー(サラ)、マリーユートピア(サラ)、クラジヨング(サラ)**■ダブリユー、アルフオルスター**(柴田牧場内)／澤山(アラ系)、オーソレミオ(準サラ)

馬産地の熱い視線は いつの時代もこの舞台に注がれる。

近代競馬

下総御料牧場での三歳馬騎乗運動風景(両総馬匹農協資料)

終戦直後に始まった競馬が馬産地を存続させていった。

昭和20年(1945)8月終戦。軍馬生産の必要もなくなり、同年11月には軍馬資源保護法が廃止された。極度の食糧難で、ただでさえ生活が苦しかった当時、この廃止決定は、軍馬生産に頼っていた農家や生産拡大を続けていた北海道をはじめとする馬産地に絶望感を与えた。

しかし、翌昭和21年に東京と京都、22年に中山競馬場で競馬が開催され、人々の熱狂的な支持を受けると、馬産地にもわずかな期待感が芽生えていった。

競馬の始まりは横浜。原点は英国に由来する。

日本で開催された最初の洋式競馬は、文久2年(1862)、横浜の居留外国人によって行われたものといわれている。また、慶応2年(1866)に完成した根岸競馬場の運営組織・横浜レースクラブによってイギリス式競馬が実施されたのが、今日わが国で施行される競馬の原型となっている。

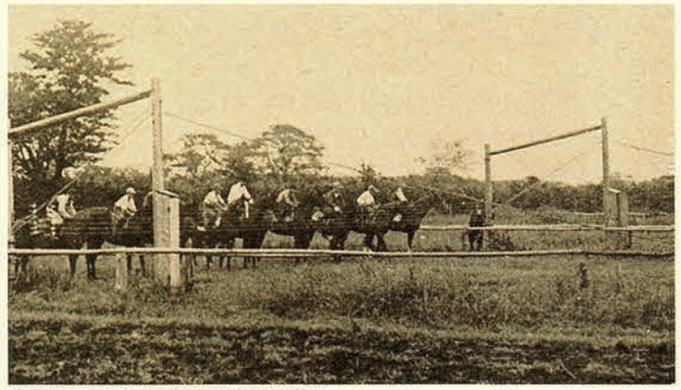
幕末の横浜競馬(馬の博物館所蔵)

明治に入ると競馬人気は高まりをみせ、明治39年(1906)に馬政計画で競馬が奨励されると、相次いで競馬法人が誕生、各地に競馬場が設立された。千葉県にも明治40年(1907)、松戸に総武競馬会社(後に松戸競馬倶楽部に改称)が発足、松戸競馬場で競馬(※9)を開催したが、馬産地に至近な競馬場とあって、開催の度に大盛況を収めた。後に中山競馬場として現在の地に移る松戸競馬場は、こうして競馬のファン層を拡大するとともに、千葉・茨城の馬産も支えていった。

全国に誕生した11競馬倶楽部は、昭和11年(1936)の競馬法改正により、合併され、現在の日本中央競馬会の前身である日本競馬会に引き継がれていった。

■競走馬の育成

戦前の競馬を席巻した下総御料牧場、小岩井農場の強さの秘密は、優良種馬の導入・繁殖成績とともに、先進的な競走馬の育成手法も見逃すことはできない。右図は昭和16年(1941)当時、下総御料牧場で行われていた騎乗運動予定表だが、千葉・茨城を拠点に生産を始めた牧場は、これを手本に駿馬輩出を目指していた。



下総御料牧場での発馬機練習(両総馬匹農協資料)

年齢	期	月	旬	騎乗場所	歩度配合	運動量	距離計	追運動	放牧運動
二歳	第一期 荷物期	十二月	下	同	乗下馬、座布団ヲクケン敷キ	同	一二〇〇米	同	同
			中	同	同	同	一二〇〇米	同	同
			上	本調教馬場一〇〇〇米	常歩二周、速歩半周、常歩半周、速歩半周	常歩一〇〇〇米、速歩一〇〇〇米	一二〇〇米	同	同
		十一月	下	同	常歩二周、常歩半周、常歩半周	同	一六〇〇米	同	同
			中	半埋馬場	常歩二周	常歩二、五〇〇米	一六〇〇米	同	同
			上	調教丸馬場	常歩	常歩	一五〇〇米	同	同
	馬会準備期	十月	下	聯合艦司令長官ノ馬会見学場	常歩	常歩八〇〇米	八〇〇米	同	基動点後放牧ニ引き自由運動
			中	馬房内	乗下馬、座布団ヲクケン敷キ				
三歳	第二期 四戦節錬期	一月	下	同	常歩一周、速歩半周、常歩半周、速歩半周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米	八〇〇米	同	同
			中	同	常歩一周、速歩半周、常歩半周、速歩半周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米	八〇〇米	同	同
			上	同	常歩一周、速歩半周、常歩半周、速歩半周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米	八〇〇米	同	同
		二月	下	同	常歩一周、速歩半周、常歩半周、速歩半周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米	八〇〇米	同	同
			中	同	常歩一周、速歩半周、常歩半周、速歩半周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米	八〇〇米	同	同
			上	同	常歩一周、速歩半周、常歩半周、速歩半周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米	八〇〇米	同	同
	第三期 健脚鍛錬期	三月	下	同	常歩一周、速歩一周、駆歩一周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米、駆歩一〇〇〇米	一〇〇〇米	同	同
			中	同	常歩一周、速歩一周、駆歩一周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米、駆歩一〇〇〇米	一〇〇〇米	同	同
			上	本調教馬場一〇〇〇米、直線調教馬場一六〇〇米	常歩一周、速歩一周、駆歩一周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米、駆歩一〇〇〇米	一〇〇〇米	同	同
		四月	下	同	常歩一周、速歩一周、駆歩一周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米、駆歩一〇〇〇米	一〇〇〇米	同	同
			中	同	常歩一周、速歩一周、駆歩一周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米、駆歩一〇〇〇米	一〇〇〇米	同	同
			上	同	常歩一周、速歩一周、駆歩一周	常歩四〇〇米、速歩二〇〇米、駆歩一〇〇〇米	一〇〇〇米	同	同
		五月	下	同	毎週一回或ハ二回 六〇〇米ヲ十五程度ニ流ス	同	一〇〇〇米	同	同
			中	同	毎週一回或ハ二回 八〇〇米ヲ十五程度ニ流ス	同	一〇〇〇米	同	同
			上	同	毎週一回或ハ二回 八〇〇米ヲ十五程度ニ流ス	同	一〇〇〇米	同	同
		六月	下	同	六〇〇米ヲ追切リ	同	一〇〇〇米	同	同
			中	同	同	同	一〇〇〇米	同	同
			上	同	毎週一回或ハ二回 一〇〇〇米ヲ十五程度ニ流ス	同	一〇〇〇米	午後追運動	同
		七月	下	同	常歩半周、速歩半周、駆歩一周、常歩半周、駆歩一周、八〇〇米追切リ一回	常歩一〇〇〇米、速歩一〇〇〇米、駆歩六〇〇〇米	一〇〇〇米	同	同
			中	同	毎週一回或ハ二回 一〇〇〇米ヲ追切リ	同	一〇〇〇米	同	同
			上	同	毎週一回或ハ二回 一〇〇〇米ヲ十五程度ニ流ス	同	一〇〇〇米	同	同
	第四期 心鍛錬期	八月	下	同	毎週一回或ハ二回 四〇〇米ヲ二十程度ニ流ス	同	一〇〇〇米	同	同
			中	同	毎週一回或ハ二回 八〇〇米ヲ十五程度ニ流ス	同	一〇〇〇米	同	同
			上	同	毎週一回或ハ二回 八〇〇米ヲ十五程度ニ流ス	同	一〇〇〇米	同	同
	第五期 速力鍛錬期	九月	下	同	毎週一回或ハ二回 六〇〇米ヲ十五程度ニ流ス	同	一〇〇〇米	同	同
			中	同	同	同	一〇〇〇米	同	同
			上	同	同	同	一〇〇〇米	同	同
	第六期 精神鍛錬期	十月	下	同	常歩一周、速歩一周、駆歩一周、常歩一周、速歩一周、駆歩一周	常歩一〇〇〇米、速歩一〇〇〇米、駆歩四〇〇〇米	一〇〇〇米	同	同
			中	同	同	同	一〇〇〇米	同	同
			上	同	同	同	一〇〇〇米	同	同
	第七期 発揮準備期	十一月	下	同	同	同	一〇〇〇米	同	同
			中	同	同	同	一〇〇〇米	同	同
			上	同	同	同	一〇〇〇米	同	同

宮内庁発行「下総御料牧場史」より

■競走体系

昭和23年(1948)、GHQの意向(※10)により、政府は日本競馬会を解散させて国営と地方、ふたつの競馬大系とする。国営競馬は後に日本中央競馬会となる。

■五大競走の確立

昭和7年(1932)、英国ダービーにならった東京優駿大競走(日本ダービー)が創設。昭和11年(1936)の日本競馬会設立後に、阪神優駿牝馬競走(オークス)、京都農林省賞典四歳呼馬競走(菊花賞)、横浜農林省賞典四歳呼馬競走(皐月賞)、中山四歳牝馬特別競走(桜花賞)が加わり、ここに日本の4歳馬5大競走が確立した。

※9.松戸競馬場の競馬／松戸競馬場は、常磐線松戸駅前の丘陵地に建設された。明治40年に開催された第1回の競馬には、抽せん新馬24頭、豪州産抽せん新馬8頭、内国産馬45頭、抽せん豪州産馬14頭の計91頭で40競走が行われ、当時で19,335円の賞金を出したという。

※10.GHQの意向／GHQ(連合国総司令部)は政府に対し、日本競馬会は民主化を阻害する独占団体として閉鎖を求めた。また、競馬施行も民間に運営させる、もしくは国が管轄する組織・団体であれば許可するとの意向を示し、政府に早急な回答を求めた。

受け継がれた馬産の伝統が花を咲かせ実を結んでいった。

競走の舞台に刻まれる馬産地「千葉・茨城」の軌跡。

東京優駿大競走（日本ダービー）の創設は、すでに大正時代から提唱されていたという。しかし、当時は下総御料牧場と小岩井農場に対抗できるほどの牧場がなかったため、優秀な競走馬を輩出する生産牧場が増加するまで待たれていた。

昭和5年（1930）以降、民間牧場が台頭し始めると、東京優駿大競走（※11）をはじめとする4歳馬のクラシック・レースが相次いで誕生。重賞（じゅうしょう）競走（※12）とよばれた。この特別なレースの優勝を目指し、生産牧場の熾烈な競争が始められた。

昭和7年（1932）から15年頃までの東京優駿大競走は、ワカタカ、トクマサ、クモハタなどの下総御料牧場トウルヌソル産駒と、カブトヤマ、ガヴァナー、セントライトを輩出した小岩井農場のシアンモア産駒で二分されていた。しかし、昭和15年以降、阪神優駿牝馬競走（オークス）優勝のルーネラ、目黒記念を制したゼンサなどの駿馬を送り出した社台ファームを筆頭に、新堀牧場（現シンボリ牧場）、ユートピア牧場（現大東牧場）など、千葉・茨城の民間牧場が次々に頭角を現してくる。そんな当時の記録の一部を右に紹介する。

優駿輩出

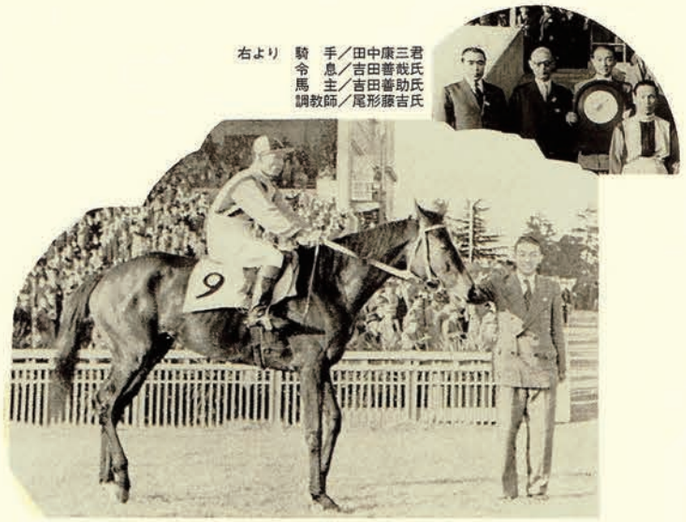
■昭和15年（1940）［目黒記念］／ゼンサ（昭和15年秋季日本競馬名鑑より）

［競走経過］スタート後、最初にテイトが飛び出し、プリンスモア、クモキク、ゴールデンモアに続き、ゴールシービー、ゼンサの順。向正面でテイトは2位以下を引き離しにかかるが、この時後方2番目のゼンサが猛追。最後の直線手前で4番手についたゼンサは、直線で力走をみせたエスパリオン、シチリダケを押さえ一気に抜けだし優勝した。

1462　11月16日　晴　良（東15秋）　第5日　第10競走　目黒記念　3,400米

吉田善助氏	尾形	9	ゼンサ	牝五	55	田中康三	3:50.2	191	901	日本競馬会賞	5,500
										登録附加賞	787
										生産者賞	550
宮本恒平氏	大久保房	6	エスパリオン	牡六	62	佐藤邦雄	1a/4	4217	4272		2,000
										登録附加賞	225
											1,000
カノウ氏	鈴木信	7	シチリダケ	牡五	56	杉浦照	1/2	1177	1664	登録附加賞	112
イー・ティー氏	布施季	8	クモキク	牡五	66	二本柳俊夫	頭	1055	1347		650
中村正行氏	廣井	5	ゼーアドラー	牡五	53.5	伊藤正四郎	3	12	152		350
沖崎藤七氏	大久保来	2	チイト	牡六	62	大久保来吉	1 1/2	53	442	拂戻金	
千明賢治氏	小内山	10	ゴールシービー	牡六	53	八木澤勝美	1 1/2	9	101	単	200.00
廣神伊藤氏	松永	1	トミタツ	牡五	52	松永光雄		7	110	特拂	11.00
タイヘイ氏	藤本	3	プリンスモア	牡五	53	阿部正太郎		36	372	複	37.50
中山登氏	中村一	4	ゴールデンモア	牡五	66	渡邊正人		508	964		20.50
											27.50
			（10頭）					7265	10325	総賞得金高	351,800圓

昭和15年秋季



右より　騎手／田中康三君
令息／吉田善哉氏
馬主／吉田善助氏
調教師／尾形藤吉氏

ゼンサ号（騎手　田中康三君）　令息　吉田善哉氏

■昭和15年（1940）［古呼馬3,200米］／トクムスメ（昭和15年秋季日本競馬名鑑より）

［競走経過］最後の直線内からキンフジ、外からトクムスメとマナヰが抜けだし激戦。競りあいの末トクムスメが優勝を飾った。

1459　11月16日　晴　良（東15秋）　第5日　第7競走　古呼馬　3,200米
（5,000圓以下、除一着賞3,000圓以上ノ競走ノ一着馬）

經塚彌三氏	稗田虎	9	トクムスメ	牝四	52	稗田十七二	3:33.3	73	336	生産者賞	2,400
											240
カノウ氏	鈴木信	10	マナヰ	牡四	55	鈴木光一郎	頭	1537	2421		650
カブト氏	尾形	5	キンフジ	牝四	53	田中康三	3	1256	2290		450
巡岡孝紹氏	高木	6	ベニシオン	牡四	55	伊藤正四郎	1/2	14	266		300
植村克巳氏	秋本	15	サクラフジ	牝五	55	光野史郎	鼻	517	976		150
古川英次氏	中村一	1	ラデン	牝四	52.5	渡邊正人	鼻	69	439	拂戻金	
小林庄平氏	大久保房	11	ヒサヨシ	牝五	55	佐藤邦雄	鼻	46	357	単	200.00
西垣長助氏	東原	12	ダテカブト	牡四	54.5	矢野幸夫		287	801	特拂	13.50
イー・ティー氏	布施季	13	セントレデヤー	牡四	56	二本柳俊夫		140	489	複	102.00
阪本清五郎氏	田中和	14	シキンブル	牝四	53	小西喜蔵		1149	1694		28.00
ユートピア氏	大久保房	3	マイユートピア	牡四	54.5	佐々木猛		1	18		28.50
大澤武夫氏	二本柳俊	2	トウネダンス	牡五	56	塩野虎治		5	137		
西博氏	古矢	4	テルクニ	牝四	54	杉山七治		9	32		
益田弘氏	佐藤順	7	タマノブ	牡四	54	千葉忠一		0	40		
倉下興市氏	加藤朝	8	コナンブ	牡五	56	羽賀由造		1	18	総賞得金高	308,360圓
			（15頭）					5104	10314		

トクムスメ号（騎手　稗田十七二君）

■昭和16年（1941）［東京優駿競走］／セントライト（昭和16年春季日本競馬名鑑より）

［競走経過］2カ月前に皐月賞を制したセントライトは、ミナミモアの後方3番手についていた。3コーナーでハッピーマインが引き離しにかかるが、4コーナーでセントライトが先頭に立ち、2着以下に大差をつけ優勝した。（セントライトはこの後、菊花賞を制して日本初の3冠馬となる）

482　5月18日　曇　重（東16春）　第6日　第9競走　東京優駿　2,400米

加藤雄策氏	田中和	12	セントライト	牡四	57	小西喜蔵	2:40.1	3281	4023	日本競馬会賞	10,000
										副賞	10,000
										生産者賞	1,000
										調教師賞	500
川内安忠氏	尾形	5	ステーツ	牡四	57	神佳達彌	8	365	1343	騎手賞	500
											3,500
豊島美王麿氏	田村仁	15	カミワカ	牡四	57	浅野武志	1 1/2	327	1507	副賞	3,500
											2,000
鈴木甚四郎氏	稲葉幸	6	テツバンザイ	牝四	55.5	稲葉幸夫	3/4	22	214	副賞	2,000
											1,300
多賀一氏	尾形	8	カヅトシ	牡四	57	大久保来吉	10	594	2034	副賞	1,300
											700
										副賞	700
エス・テー氏	尾形	16	メイレキ	牝四	55.5	田中康三	3/4	291	1908	拂戻金	
加藤雄策氏	田中和	2	ブランドソール	牝四	55.5	阿部正太郎	5	2213	2991	単	55.50
タイヘイ氏	藤本	7	ヨシワカ	牡四	57	坂内光雄		15	188	複	39.50
池得次氏	高木	14	ミナミモア	牡四	57	伊藤正四郎		3384	5657		86.50
竹中久蔵氏	秋山	1	ハッピーマインド	牝四	55.5	光野史郎		324	1402		79.00
カナヤマシ氏	田中和	11	トキノノゾミ	牡四	57	岩下密政		40	258		
榎壽造氏	清水茂	13	マルラク	牡四	57	新冨幸吉		195	1212		
片山智雄氏	鈴木信	10	ミスマサキ	牝四	55.5	松永光雄		70	791		
飯原盛作氏	岩井	4	ユキヒサ	牡四	57	岩井健吉		20	302		
杉村友三郎氏	赤石	3	カツタダヤマ	牡四	57	山中正二		22	205		
盛田喜平治氏	若山	9	モリヤカブト	牡四	57	佐藤修		14	154	総賞得金高	707,320圓
			（16頭）					11177	24189		

セントライト号（騎手　小西喜蔵君）　馬主　加藤雄策氏

■昭和16年（1941）［古呼馬2,300米］／カミワカ（昭和16年春季日本競馬名鑑より）

［競走経過］前半ゲルマンを先頭に、エスプリモア、テイト、カミワカが追走。直線手前でウアルドマイン、カミワカ、ゼンサの3頭の激戦となるが、最後にカミワカが力走をみせて優勝した。

472　5月17日　雨不良（東16春）　第5日　第10競走　古呼馬ハンデキャップ　2,300米

豊島美王麿氏	田村仁	12	カミワカ	牡四	56	浅野武志	2:37.4	400	899	生産者賞	2,800
											280
中村勝五郎氏	稲葉秀	7	ウアルドマイン	牡五	60	平井寅雄	1 1/4	230	672		600
吉田善助氏	尾形	2	ゼンサ	牝六	64	武富三	2	1017	1892		400
野口安太郎氏	佐藤重	13	ゲルマン	牝五	53	中野才一	1 1/2	137	527		250
荒井初太郎氏	大久保房	14	エスプリモア	牡六	55	佐藤邦雄	頭	4	75		150
田中松彦氏	中村一	11	ガスト	牝五	55	渡邊正人	頭	743	1034	拂戻金	
エツチ、アイ氏	布施季	1	セイビンド	牡五	59	村井三義	5	152	400	単	200.00
竹中久蔵氏	秋山	9	ハッピーメード	牝五	60	宮澤今朝太郎		1832	1932	特拂	3.00
福原政治氏	中森弘	5	フクセイコ	牝六	61	野平省三		261	752	複	60.50
飯田次郎氏	神佳	6	ハルナダケ	牡五	61	神佳達彌		321	591		75.00
經塚彌三氏	稗田虎	10	ホウカツピータ	牡五	60	安藤徳男		340	671		37.00
沖崎藤七氏	大久保来	4	テイト	牡七	61	大久保来吉		357	798		
和田孝一郎氏	尾形	8	タイレイ	牝五	57	田中康三		98	294		
木村敬三郎氏	佐々木栄	3	オイテカゼ	牡六	53	森末之助		12	184		
			（14頭）					5904	10721	総賞得金高	332,500圓

カミワカ号（騎手　浅野武志君）　馬主　豊島美王麿氏

※11.東京優駿大競走／昭和7年（1932）4月24日に目黒競馬場で初の開催が行われたこのレースは、競馬と馬産の強化が主目的であったため、出場馬の資格は2歳の国内産馬（抽せん馬を除く）と決められ、昭和5年に出馬申込が行われた。この年、168頭の申込みがあったという。

※12.重賞競走／「賞金の高い競走」の意味から使われるようになった。東京優駿大競走創設時の一着賞金は1万円で、これに登録付加料金として一着本賞金を上回る破格の賞金が贈られた。この当時の馬券は1枚20円、大学卒の初任給は70円であった。

受け継がれる血脈のなかに優駿誕生のナゾが隠されている。

父・母の偉大な足跡を仔どもたちが未来へと伝承する。

終戦間もない昭和21年(1946)8月、名種牡馬・トウルヌソル(※13)が老衰でこの世を去った。その年の10月、競馬が再開し、翌22年にはクラシック・レースが復活。戦後最初に開催された東京優駿競走(日本ダービー)には、アヤニシキ(飯田牧場産)、トキノミドリ(若草牧場産)、ミツカゼ(菅井牧場産)など、千葉の台地に育まれた産駒が挑戦していった。

日本が将来へ向けての復興・再生へと歩み出したこの時代、千葉・茨城の馬産もまた、新旧世代交代から、新たな優駿物語へと歩んでいくことになった。

名血伝承

クモハタ(JRA©)

■顕彰(けんしょう)馬

中央競馬の発展に貢献のあった名馬の功績を称え、後世に伝えようと、日本中央競馬会創立30周年記念事業の一環として昭和59年(1984)に設けられたもの。平成10年現在、24頭の顕彰馬のうち、千葉県産として、下総御料牧場で生産されたクモハタ、クリフジ(※14)が選出されている。

ダイオライト

サラブレッド

西暦1927(昭和2)年生

黒鹿毛

額剣毛　珠目上　吭掛

左髪中　初地　尾根剣毛

右前一白　後二微白

体　高　161.0糎

胸　囲　191.0糎

管　囲　19.0糎

所有者

千葉縣印旛郡遠山村

宮内省下総牧場

種付料　500 圓

繋養地

千葉縣印旛郡遠山村

宮内省下総牧場

産地及生産者

英　國

Col.C.W.Birkin

略歴

昭和10年宮内省英國ヨリ8,500磅ニテ輸入シ(購買官農林技師横屋潤氏、農林技師井上綱雄氏)直チニ下総牧場ニ種牡馬トシテ繋養シ現在ニ至ル

血統(血統登録　第十二卷　第壱百七拾参號)

サラ 輸入(英) ダイオライト Diolite 1927							
母 ニードルロック Needle Rock 1915				父 ダイオフオン Diophon 1921			
Needlepoint 1908		Imp. Rock Sand 1900		Donnetta 1900		Grand Parade 1916	
Etui 1902	Isinglass 1890	Roquebrune 1893	Sainfoin 1887	Rinovata 1887	Donovan 1886	Grand Geraldine 1905	Orby 1904
Pindi 1893	Dead Lock 1883	St.Simon 1881	St.Marguerite 1879	Travista 1881	Wenlock 1869	Desmond 1896	Orme 1889
	Broad Knife 1878	Isonomy 1875	Deverem 1879	Springfield 1873	Galopin 1872	Grand Manner 1900	Rhoda B. 1895
		Dead Lock 1878	Isola Bella 1868	Sunda 1878	Mowerina 1876	Galopin 1872	Hannover 1884
			Woodcock 1869	Wenlock 1869	Scottish Chief 1863	Fiser's Balsam 1885	Marguerite 1886
			Malapropper 1854	Cremorne 1875	Stockinger 1863	Galopin 1872	Lady Mecrist de Jessaint 1886
			Slice 1871	The White Lady 1864	Mineral 1863	Flying Duchess 1853	Galopin 1872
			Mildmay 1854	Vivida 1864	Cremorne 1875	Scottish Chief 1863	Fiser's Balsam 1885
			Dor 1872	Woodcock 1869	Wenlock 1869	Galopin 1872	Galopin 1872
				Sunbeil 1864	Stockinger 1863	Stockinger 1863	Galopin 1872
				St.Angela 1873	Mineral 1863	Mineral 1863	Galopin 1872
				Hermit 1864	Cremorne 1875	Cremorne 1875	Galopin 1872
				Deverem 1879	Wenlock 1869	Wenlock 1869	Galopin 1872
				Isola Bella 1868	Malapropper 1854	Malapropper 1854	Galopin 1872
				Woodcock 1869	Slice 1871	Slice 1871	Galopin 1872
				Malapropper 1854	Dor 1872	Dor 1872	Galopin 1872
				Slice 1871			
				Dor 1872			

競走成績

出走時明ケ年齢	成績 競走種別	著順 一著	二著	三著	著外	計	収得賞金 磅
三歳	駈歩	3	1	1	—	5	6,519
四歳	駈歩	1	—	2	2	5	10,543.5
五歳	駈歩	1	1	2	4	8	1,055
六歳	駈歩	1	—	—	5	6	830
計		6	2	5	11	24	18,947.5

一著サトリタル競走	一著以外ノ主ナル競走(賞金千磅以上ノ競走)
Spring Two yrs old Stakes	Derby(デービー) Stakes(3) Fera Hill Stakes(3)
Coventry Stakes	St.Leger(セントレジャー) Stakes(6) Champion Stakes(7)
Molecomb Stakes	Victoria Cup(3) Royal Hunt Cup(h'cap)(5)
ネモボニー 2000gs Stakes	Kempton Park Great "Jubilee" Handicap(8)
Grosvenor Cup(h'cap)(2回)	Ribblesdale Stakes(6) Stewards' Cup(h'cap)(4)
	Lincolnshire Handicap(5)
	Great Cheshire h'cap Stakes(4)
	Queen Anne Stakes(12) Rous Memorial Stakes(4)
	Cambridgeshire Stakes(h'cap)(9)

初出走　1929年春季 ニューマーケット Newbury 競馬　最終出走　1932年秋季 リバプール Liverpool 競馬

蕃殖成績

種付年次	種付頭数	受胎頭数	受胎率%	生産頭数	生産率%	種付料円	主ナル産駒
昭和 11 年	17(20)	13	76.5	12 牡1 牝11	70.6	500	チツザクラ、ダイオメデア、ハツピーメード、ハイクレーン、シーラス、ミヌコウデ、ルフロン
同 12 年	16(21)	14	87.5	13 牡6 牝7	81.3	500	カミツカ、セントライト
同 13 年	17(23)	12	70.6	12 牡7 牝5	70.6	500	
同 14 年	19(33)	15	78.9	8 牡3 牝5	42.1	500	
同 15 年	(27)					500	
同 16 年						500	

備　考　種付頭数欄中ノ括弧内ノ数字ハ餘勢種付ヲ示シ蕃殖成績不明トス

トウルヌソル

サラブレッド

西暦1922(大正11)年生

鹿毛

微星　珠目下　左後微白

体　高　161.0糎

胸　囲　185.0糎

管　囲　20.0糎

所有者

千葉縣印旛郡遠山村

宮内省下総牧場

種付料　500 圓

繋養地

千葉縣印旛郡遠山村

宮内省下総牧場

産地及生産者

英　國

M.M.Calmann

略歴

昭和2年宮内省英國ヨリ98,076圓ヲ以テ輸入(獣医学博士丹下謙吉氏ニ委託購買)直チニ種牡馬トシテ下総牧場ニ繋養シ現在ニ至ル

血統(血統登録　第四卷　第四七六號)

サラ 輸入(英) トウルヌソル Tournesol 1922							
母 Imp. ソリスト Soliste 1910				父 ゲエーンスボロー Gainsborough 1915			
Sées 1899		Imp. Prince William 1903		Rosedrop 1907		Bayardo 1906	
La Goulue 1891	Chesterfield 1888	La Vierge 1890	Imp. Bill of Portland 1890	Rosaline 1901	St. Frusquin 1893	Galicia 1898	Bay Ronald 1893
Rosary 1878	Prism 1880	Bramble 1874	Wisdom 1873	Rosalys 1894	Isabel 1879	Isolietta 1891	Hampton Black Duchess 1872 1886
	Lucia 1878	Sylva 1874	Hermit 1864	Imp. Trenton 1881	St. Simon 1881	St. Simon 1881	Galopin 1872
	Rainbow 1871	Sister 1866	Beadsman 1842	Rosa Mayr 1871	Isola Bella 1868	Lady Muscovite 1871	Fiser's Balsam 1885
	Lady Reverdie 1871	Bleedmoor 1871	Lady Langdale 1866	Fairly 1864	Galopin 1872	Galopin 1872	Galopin 1872
		Fair Rosamond 1871	Lord Clifden 1860	Prunia 1877	St. Angela 1873	St. Angela 1873	Galopin 1872
			Lady Langdale 1866		Beverley Head 1865	Beverley Head 1865	Galopin 1872
			Lady Reverdie 1871		Galopin 1872	Galopin 1872	Galopin 1872
					St. Simon 1881	St. Simon 1881	Galopin 1872
					Electric Light 1876	Electric Light 1876	Galopin 1872
					Hampton 1872	Hampton 1872	Hampton 1872
					Elizabeth 1877	Lord Clifden 1860	Lord Clifden 1860
						Lady Langdale 1866	Lady Langdale 1866
						Lady Langdale 1866	Lady Langdale 1866
						Fair Rosamond 1871	Fair Rosamond 1871

競走成績

出走時明ケ年齢	成績 競走種別	著順 一著	二著	三著	著外	計	収得賞金 磅
三歳	駈歩	—	—	—	2	2	—
四歳	駈歩	3	4	1	4	12	1,851
五歳	駈歩	1	1	1	4	7	2,660
六歳	駈歩	2	—	—	1	3	2,114
計		6	5	2	11	24	6,625

一著サトリタル競走	一著以外ノ主ナル競走(賞金千磅以上ノ競走)
Duchess of York Plate	St. Leger(セントレジャー) Stakes(11) Ebor Handicap(5)
Elvaston Castle Maiden (at closing) Plate	Hardwicke Stakes(2) Eclipse Stakes(9)
Zetland Plate	Cesarewitch Stakes (h'cap)(15)
Princess of Wales's Stakes	Manchester Cup (h'cap)(11)
Queen's Prize h'cap	Ascot Stakes (h'cap)(3) Gold Cup(4)
Great Northern Handicap Plate	Northumberland Plate (h'cap)(2)
	Newbury Autumn Handicap (7)

初出走　1924年秋季 ニューマーケット Newmarket 競馬　最終出走　1927年春季 アスコット・ヒース Ascot Heath 競馬

蕃殖成績

種付年次	種付頭数	受胎頭数	受胎率%	生産頭数	生産率%	種付料円	主ナル産駒
昭和 3 年	25(12)	22	88.0	21 牡10 牝11	84.0	500	アサタカ、アサオホギ、アサハギ、アサナリ、ワカタカ、ワカマサ
同 4 年	29(13)	22	75.9	21 牡10 牝11	72.4	500	イワタダ、イワタカ、イワハニ、イワアラシ、キタノハナ、ナスヒカリ、ハツピーランド、ワカミチ
同 5 年	24(15)	21	87.5	21 牡10 牝11	87.5	500	ワラシタ、イワセツ、キーシス、スパーシタン、トーチ、ニシキ、ヒロミヤチヨダ、ユキオミ、ユキヤス、ユキイエ
同 6 年	24(14)	19	79.2	17 牡9 牝8	70.8	500	トーナメント、フヂマサ、フヂヤス、モアーザン
同 7 年	28(20)	24	85.7	24 牡14 牝10	85.7	500	イワキカブ、キヌ、トクサ、ナスハハ、ハツピーラボ、ピユアフーム、ランセーン、ワムス、ワカブク
同 8 年	27(4)	25	92.6	22 牡10 牝12	81.5	500	フヂマス、アブマタケ、キタクジフ、ハツピーマイ、ヒサトモ、ホーネン、トーヨー
同 9 年	26(8)	19	73.1	18 牡7 牝11	69.2	500	クサブエ、スタミナ、ヲエヤマ、チルタダ、ランレイ、リツチモアー、ワカムシヤ
同 10 年	22(18)	21	95.5	18 牡6 牝12	81.8	500	ガードナー、クモキタ、クモハタ、トキノチカラ、トクオ、バツトルシツプ
同 11 年	10(20)	9	90.0	8 牡3 牝5	80.0	500	イエリユウ、イエトモ、クモゼキ、ヒメギミ
同 12 年	11(20)	8	72.7	7 牡4 牝3	63.6	500	
同 13 年	8(20)	5	62.5	4 牡2 牝2	50.0	500	
同 14 年	6(18)	6	100.0	6 牡3 牝3	100.0	500	
同 15 年	27					500	
同 16 年						500	

備　考　種付頭数欄中ノ括弧内ノ数字ハ餘勢種付ヲ示シ蕃殖成績不明トス　15年ノ種付頭数ハ餘勢種付ヲ含ム

月　友

サラブレッド

西暦1932(昭和7)年生

栗毛

流星　血醉三　珠目正

下唇白　右前左後二白

左腎部S烙印

体　高　161.5糎

胸　囲　186.0糎

管　囲　20.0糎

所有者

千葉縣印旛郡遠山村

宮内省下総牧場

種付料　300圓

繋養地・産地及生産者

千葉縣印旛郡遠山村

宮内省下総牧場

略歴

昭和6年母馬妊孕ノママ輸入生産シタルモノニシテ武歳時ニ故障發生シタルヲ以テ競馬ニ出走セシメズ四歳ヨリ下総牧場ニ於テ種牡馬トシテ供用昭和11年帝室林野局札幌支局新冠出張所ニ種牡馬トシテ貸付

昭和15年8月再ビ下総牧場ニ歸場シ種牡馬トシテ供用シ現在ニ至ル

血統(血統登録　第九卷　第壹〇六七號)

サラ 月友 1932(昭和7年3月13日生)							
輸入(米国) 母 星友 (前名Alzada) 1923				(米国) 父 マンノウォー Man O'War 1917			
Imp. Colna 1909		Sir Martin 1906		Mahubah 1901		Fair Play 1905	
Nanaica 1903	Collar 1895	Lady Sterling 1899	Imp. Ogden 1894	Imp. Merry Token 1891	Imp. Rock Sand 1900	Imp. Fairy Gold 1896	Hastings 1893
Verte Grez 1893	Gallinule 1884	St. Simon Ornament 1881 1887	Hanover Imp. Aquila 1884 1891	Kilwarlin Imp. Orbole 1884 1887	Mercy Hampton Marpuh 1884 1880	Sainfoin Roquebrune 1887 1893	Spearmint Imp. Cinderella 1876 1885
	Wrestling Vendigoin 1886	Vendigoin 1883	Lady Agnes 1875	Ladybird 1871	Lady Langdale 1866	Sainfoin 1887	Bend Or Dame Masham 1877 1889
			Bend Or 1871	Bend Or 1877	Hampton Lady Langdale 1872 1866	Springbok 1877	Rosebery Galliard 1870 1880
			Lady Agnes 1875	Ladybird 1871	Marmaduke Wyndham 1872 1863	Sir Gaston 1881	Bend Or Doncaster 1877 1870
			Bend Or 1871	Isonomy 1875	Blair Athol Blair Firm 1864 or Tomahawk 1867	St. Marguerite 1879	Isonomy Marsa 1875 1864
			Isola Bella 1868	Isola Bella 1868	Isola Bella 1868	Deverem 1879	Isola Bella 1868
			Woodcock 1869	Woodcock 1869	Woodcock 1869	Isola Bella 1868	Woodcock 1869
			Malapropper 1854	Malapropper 1854	Malapropper 1854	Woodcock 1869	Malapropper 1854
			Slice 1871	Slice 1871	Slice 1871	Malapropper 1854	Slice 1871
			Dor 1872	Dor 1872	Dor 1872	Slice 1871	Dor 1872
						Dor 1872	

母馬ノ略歴

星友ハ米国産ニシテ米国産サラブレッド種牡馬「マンノウォー」交配妊孕ノママ昭和6年宮内省米国ヨリ輸入シ[一條友吉氏ニ委嘱購入]下総牧場ニ於テ種牡馬トシテ供用

出走シタル主ナル兄弟馬

異父妹(父トウルヌソル)ヒサトモ

蕃殖成績

種付年次	種付頭数	受胎頭数	受胎率%	生産頭数	生産率%	種付料円	主ナル産駒
昭和 10 年	4(3)	4	100.0	4 牡3 牝1	100.0	20	アルトラ
同 11 年	16	14	87.5	14 牡10 牝4	87.5	30	コマオー、キミタカ、セイビン、タカホマレ
同 12 年	20	13	65.0	13 牡8 牝5	65.0	30	
同 13 年	24	17	70.8	17 牡6 牝11	70.8	50	
同 14 年	33	22	66.7	21 牡13 牝8	63.6	50	
同 15 年	35					100	
同 16 年						300	
同 17 年							
同 18 年							
同 19 年							

備　考　種付頭数欄中ノ括弧内ノ数字ハ餘勢種付ヲ示シ蕃殖成績不明トス

■主な旧字

●糎(センチメートル)＝長さの単位(cm)●圓(えん)＝日本の通貨単位(円)●磅(ポンド)＝英国の通貨単位●妊孕(にんよう)＝妊娠●歸場(きじょう)＝帰場●壹(いち)＝漢数字の一(壱)●貳(に)＝漢数字の二(弐)●參(さん)＝漢数字の三●號(ごう)＝号●委囑(いしょく)＝委嘱●著順(ちゃくじゅん)＝着順●餘勢(よせい)＝余勢●蕃殖(はんしょく)＝繁殖

※13.トウルヌソルの生涯成績／明け4歳から6歳までの英国での競走成績は一着6回、二着5回、三着2回で収得賞金は6,625ポンド。日本で6歳から19歳まで種付に供用し、種付頭数462頭、余勢種付けを含む産駒は374頭で、その中から6頭の東京優駿競走優勝馬を輩出した。

※14.クリフジ／トウルヌソル産駒として6番目に東京優駿競走を制覇した、ヒサトモ(父トウルヌソル、母星友)に次ぐ史上2番目の牝馬のダービー馬であり、阪神優駿牝馬競走(オークス)、京都農林省賞典四歳呼馬競走(菊花賞)を制した。馬主は大東牧場のオーナー栗林友二氏。

優良馬の血統が千葉から全国へ巣立っていった。

ここに紹介している7頭は、昭和16年(1941)に日本競馬會が発行した「サラブレッド系統種牡馬名簿」の第一巻に記載された千葉県内のサラブレッド及びサラブレッド系種の種牡馬である。こうした詳細で正確な血統表・種牡馬名簿が今日の競走馬資源として伝えられているのは、大正12年(1923)の社団法人帝国競馬協会以降、登録機関名の変遷はあろうとも、一貫して厳正な血統登録事業に力を注いできた今日の社団法人日本軽種馬登録協会の功績ということができる。

伯　優

(競馬名　ジョンブル)

サラブレッド

西暦1931(昭和6)年生

鹿毛

星　珠目二列　鼻白　髦中

体　高　150.5糎

胸　圍　181.5糎

管　圍　21.0糎

所有者

千葉縣印旛郡遠山村

宮内省下総牧場

種付料　30圓

繋養地

千葉縣印旛郡遠山村

宮内省下総牧場

産地及生産者

北海道静内郡静内町帝室林野局札幌支局新冠出張所

略歴

昭和5年母馬妊孕ノママ輸入出産シタルモノニシテ昭和8年帝室林野局新冠出張所市場ニ於テ乾鹿三(いぬいていぞう)氏12,000圓ヲ以テ購入シ競神競馬場諏訪佐市調教師ニ預託

昭和10年帝室林野局買戻シ新冠出張所ニ種牡馬トシテ繋養

同14年秋宮内省下総牧場ニ移管繋養シ現在ニ至ル

血統(血統登録第七巻第八〇九號)

サラ　伯　優 1931(昭和6年3月20日生)			
輸入(英国) 母 ステフアニア Stephania 1923		父 ノツカンドー Knockando 1920	
Picotte 1912	Stefan the Great 1916	Spean Bridge 1910	Phalaris 1913
Javette	Picton	Perfect Peach	The Tetrarch	Santa Brigida	Spearmint	Bromus	Polymelus
1893	1903	1907	1911	1898	1903	1905	1902
Wisdom	Orviesto	Persimmon	Pascimmon	Roi Hérode	Vahren	Sainfoin	Chocry
1873	1888	1893	1897	1904	1897	1887	1892
Erminie	Hecuba	Royal Hampton	Royal Hampton	Bridget	Maid of the Mint	Spearmint	Carbine
1884	1891	1896	1882	1888	1897	1885	1885
Zaslot	Nagnall	Hermit	Gardevin	St. Simon	Minoru	Wildfire	Maid of Mansfield
Cardular	Bilsdale	Bellona of Troy	Rosaline	Mazurka	Wildfire	Sainfoin	Sainfoin
1877	1864	1875	1878	1875	1904	1878	1881
1874	1862	1873	1875	1875	1894	1876	1883

生産者同士が手を結び
地域の馬産を支えてきた。

馬匹農協

■日本軽種馬協会の事業
軽種馬の改良、生産および流通の充実に努めるとともに、協会員の安定経営に資する事業として、種付事業、育成技術者養成事業を行うほか、JBIS（軽種馬改良情報システム）、競走馬のふるさと案内所の運営など、幅広い分野で日本の軽種馬生産を支援している。

■競走馬のふるさと千葉県案内所
牧場訪問を希望する競馬ファンと、防疫等の理由から安易に受け入れがたい馬産地との調整を図り、生産者の障害になることなく馬産地の情報を提供するために設けられた施設。千葉県案内所は、（社）日本軽種馬協会の事業として昭和63年（1988）、日高案内所に次いで開設された。現在、案内所は十勝、胆振、東北、那須、九州の馬産地に設置されている。

馬とともに歩んだ専門農協の軌跡。

下総御料牧場とともに、千葉・茨城の馬産の基礎を育み・歴史を刻んできたのが千葉県両総馬匹農業協同組合。

当組合の前身である両総馬匹組合（※15）は、大正15年（1926）に印旛郡・山武郡の24町村で構成された両総畜産組合の設立に参加。以後、軍馬を中心に、運搬・農耕馬の生産、育成、種付け、せり市場の開催など、多角的な事業を両組合の名のもとに展開。地域に馬産を広め、牧場を根付かせる土台づくりに努力した。

現在の千葉県両総馬匹農業協同組合

軍馬生産がなくなり、終戦直後の業務は一時停滞するが、競走馬生産の復活で昭和26年（1951）に経営を再開。この時に、運営の強化策として、軽種馬生産農業協同組合（※16）千葉県支部の参加となった。しかし、農耕・運搬の主流は時代とともに内燃機関を動力にする機械に替えられ、馬の需要は競走馬が主となっていった。このため、昭和41年（1966）に両総馬匹組合を解散させ、社団法人日本軽種馬協会千葉県支部と共に地域の馬産事業を展開する組織として、千葉県両総馬匹農業協同組合の設立となった。

※15.両総馬匹組合／富里村史によると、小川多一郎、内田恒蔵、内田勝一郎、秋本重吉、増田惣吉らが500円を出資し、山武郡に派遣されていた農林省の種馬の権利を取得して育舎を構えたとあり、後に畜産連合が行う地方競馬の利益を借り受け、経営を拡大していったという。

※16.軽種馬生産農業協同組合／昭和21年（1946）に社団法人サラブレッド協会として設立。その2年後に競馬の国営移管に伴う「事業者団体法」によって軽種馬生産農業協同組合として発足した全国規模の生産者団体。昭和30年に現在の（社）日本軽種馬協会に改められる。

馬産の伝統を次世代へつなげる。

生産地から育成の拠点へ。時代は馬産地を変えた。

戦後の競馬はすぐに活況をみせたが、農地解放政策(※17)による土地の買収等により、千葉・茨城地域は戦前ほどの生産能力はなくなっていた。また、努力の末に生産を再開したものの、今度は急速な都市化が牧場を圧迫していった。

こうした状況から、生産を東北・北海道へ移し、育成・調教を当地で行う、牧場の分場化が昭和30年代頃から進められた。

昭和39年(1964)のオリンピック東京大会を機に、交通体系の整備・拡充が図られると、これら分場化による遠距離問題も解消され、昭和40年代後半の競馬ブームでは、即戦力としての千葉・茨城の地の利が大いに発揮された。また、昭和53年(1978)に待望の日本中央競馬会美浦トレーニング・センターが完成すると、この地域に対する育成・調教の要望が一層高まりをみせ、これを契機に、千葉・茨城地域は次第に生産から育成主体の馬産地へと変わっていった。

昭和から平成へ。急速な時代の流れのなか、こうして競走舞台の前線基地としての地位を確立していった千葉・茨城地域は、平成元年(1989)のウイナーズサークル(茨城県・栗山牧場生産)、同11年のアドマイヤベガ(ノーザンファーム生産)など、ほぼ10年サイクルで東京優駿(日本ダービー)を制覇する名馬を輩出。生産・育成のネットワークが「強い馬づくり」の源になっていることを立証している。

ウイナーズサークル
(JRA©)

アドマイヤベガ
(JRA©)

■美浦トレーニング・センター
200万平方メートルに及ぶ広大な敷地に、123棟の厩舎(2,304頭の競走馬を収容可能)、多彩な馬場コースが整う国内最大のトレーニング・センター。(詳細は裏表紙参照)

育成牧場

※17.農地解放政策／昭和21年(1946)、GHQ(連合国総司令部)は政府に対し、国が地主から農地を買い取り、小作農に売却する「農地解放及び農地改革の計画案」を提示。政府はこれを受け入れ、翌22年より国の農地買収を実施。これにより、わが国の地主制は消滅した。

「馬のあゆみ」略年表

1875(明治8年) 下総牧羊場と取香種畜場が開設される。
1878(明治11年) アラブ種牝馬吾妻号が取香種蓄場に移管される。
1880(明治13年) 下総牧羊場と取香種畜場が下総種畜場に改称。下総種畜場で変則獣医科が発足。
1888(明治21年) 下総種畜場が下総御料牧場と改称。根岸競馬場で馬券発行の競馬が開催された。
1891(明治24年) 小岩井農場が開設される。
1894(明治27年) 日清戦争勃発。馬匹調査会設置。
1904(明治37年) 日露戦争勃発。馬政調査委員会設置。
1905(明治38年) 政府は競馬の馬券発行を黙認する。
1906(明治39年) 馬券の発行を行う競馬施行。馬匹改良増殖政策(馬政第一次計画)の実施。菅井牧場が開設される。
1908(明治41年) 競馬の馬券発売が禁止される。
1911(明治44年) 馬産地の代表者が集結して大日本産馬会を創立。
1914(大正3年) 御料牧場官制の公布。日本サラブレッド協会が設立するが、生産者の賛同が得られず解散。
第一次世界大戦勃発。
1922(大正11年) 御料牧場官制廃止により下総御料牧場は宮内省下総牧場と改称。宮内省下総牧場における軽種馬繁殖業務を中止し、種牝馬を新冠牧場へ移す。
1923(大正12年) 軍用馬確保を目的にした競馬法制定により、馬券の発売が公認される。社団法人帝国競馬協会設立。
1926(大正15年) 新堀牧場が開設。
1927(昭和2年) 宮内省下総牧場の軽種馬繁殖事業が再開され、新冠牧場の種馬を下総牧場に移す。宮内省下総牧場にサラブレッド種牡馬トウルヌソル号が輸入される。
1932(昭和7年) 東京優駿大競走(日本ダービー)創設。第1回東京優駿大競走(日本ダービー)でワカタカ(宮内省下総牧場)が優勝。
1935(昭和10年) 宮内省下総牧場にサラブレッド種牡馬ダイオライト号が輸入される。
1936(昭和11年) 競馬法が大改正され、日本競馬会が設立。馬政第一次計画を継承した馬政第二次計画実施。第5回東京優駿競走(日本ダービー)でトクマサ(宮内省下総牧場)が優勝。
1937(昭和12年) 社団法人帝国競馬協会解散。競走馬生産者協会が設立されるが、後に戦争激化のため自然消滅。第6回東京優駿競走(日本ダービー)でヒサトモ(宮内省下総牧場)が優勝。
1938(昭和13年) イギリスのクラシックレースにならった、4歳馬五大特別競走が始まる。
1939(昭和14年) 種馬統制法施行。軍馬資源保護法施行。地方競馬が廃止され、鍛錬馬競走が開催される。第8回東京優駿競走(日本ダービー)でクモハタ(宮内省下総牧場)が優勝。
1940(昭和15年) 第9回東京優駿競走(日本ダービー)でイエリュウ(宮内省下総牧場)が優勝。
1941(昭和16年) 第二次世界大戦勃発。「サラブレッド血統書」「サラブレッド系統種牡馬名簿」が刊行される。第10回東京優駿競走(日本ダービー)でセントライト(小岩井農場)が優勝し、日本初の三冠馬となる。
1942(昭和17年) 日本馬事会設立。宮内省下総牧場は下総御料牧場と改称される。
1943(昭和18年) 第12回東京優駿競走(日本ダービー)でクリフジ(下総御料牧場)が優勝。
1944(昭和19年) 日本競馬会による能力検定競馬(馬券のない競馬)以外の競馬禁止。
1945(昭和20年) ポツダム宣言受諾により第二次世界大戦終結。
1946(昭和21年) サラブレッド生産者団体である社団法人サラブレッド協会設立。地方競馬法公布。下総御料牧場の軽種馬繁殖業務が中止される。
1948(昭和23年) 公認競馬を国営、地方競馬を地方公共団体の直営とした新しい競馬法制定。独占禁止法により日本競馬会解散。種畜法公布。社団法人サラブレッド協会が「事業者団体法」により解散、軽種馬生産農業協同組合設立。社団法人軽種馬登録協会設立。
1949(昭和24年) 下総御料牧場の軽種馬繁殖業務再開。
1952(昭和27年) 第19回東京優駿競走(日本ダービー)でクリノハナ(大東牧場)が優勝。
1954(昭和29年) 日本中央競馬会設立。
1955(昭和30年) 軽種馬生産農業協同組合が解散し、社団法人日本軽種馬協会が設立される。
1962(昭和37年) 社団法人日本軽種馬協会の直営種付事業として、成田市三里塚に三里塚種馬場設置(昭和45年富里町に移転後、下総種馬場と改称)。
1966(昭和41年) 千葉県両総馬匹農業協同組合設立。
1967(昭和42年) 第34回東京優駿競走(日本ダービー)でアサデンコウ(千葉新田牧場)が優勝。
1969(昭和44年) 下総御料牧場閉場。栃木県高根沢町に移転。
1971(昭和46年) 国の政策として活馬の輸入自由化実施。馬のインフルエンザ大流行。各地で競馬が中止される。
1978(昭和53年) 第45回東京優駿競走(日本ダービー)でサクラショウリ(シンボリ牧場)が優勝。茨城県美浦村に美浦トレーニング・センター完成。新東京国際空港開港。
1982(昭和57年) 日本中央競馬会本部の付属機関として競馬学校が設立される。
1984(昭和59年) 第51回東京優駿競走(日本ダービー)でシンボリルドリフ(シンボリ牧場門別)が優勝。昭和60年には七冠馬となる。日本中央競馬会顕彰馬を設置。
1985(昭和60年) 第52回東京優駿競走(日本ダービー)でシリウスシンボリ(シンボリ牧場)が優勝。
1986(昭和61年) 第53回東京優駿競走(日本ダービー)でダイナガリバー(社台ファーム早来町)が優勝。
1988(昭和63年) 両国市場完成。競走馬のふるさと千葉案内所設立。
1989(平成元年) 第56回東京優駿競走(日本ダービー)でウイナーズサークル(栗山牧場)が優勝。

《参考文献》
■下総御料牧場第三期事業報告／1904／下総御料牧場■日本競馬銘鑑東京版昭和15年秋季／1940／馬事思想普及會■日本競馬銘鑑中山版昭和15年秋季／1940／馬事思想普及會■日本競馬銘鑑東京版昭和16年春季／1941／馬事思想普及會■宮内省下総牧場における競走馬の育成調教／1941／日本競馬會■サラブレッド系統種牡馬名簿第一巻／1941／日本競馬會■日本競走馬生産者協會下総支部案内／1942／東英社■昭和38年サラブレッド系二歳馬名簿／1963／社団法人日本軽種馬協会■日本競馬史1巻～7巻／1967～75／日本中央競馬会■創立十周年記念軽種馬沿革史優駿のふるさと日高／1970／日高軽種馬農業協同組合■日本の競走馬生産／1972／治本元一／日本中央競馬会■下総御料牧場史／1974／宮内庁■競馬百科／1976／日本中央競馬会編■昭和55年度優良産駒生産牧場実態調査報告書／1980／日本中央競馬会■富里村史通史／1981／千葉県富里町■成田市の文化財／1982／成田市教育委員会■日本ダービー50年史／1983／日本中央競馬会■畜産全書畜産総論・馬／1983／社団法人農山漁村文化協会■北総台地の産業獣医師(戦前編)／1984／北部家畜防疫獣医師編■日本軽種馬協会三十年史／1985／社団法人日本軽種馬協会■成田史近現代編／1986／成田市■競馬用語集／1987／日本中央競馬会■馬は語る／1987／沢崎坦／岩波書店■千葉県畜産発達史／1989／千葉県畜産発達史編さん会■馬／1989／藤田秀司／秋田文化出版社■文明開化うま物語／1989／早坂昇司／有隣書店■北総台地の産業獣医師(戦後編)／1992／北部家畜防疫獣医師編■競馬社会の戦後史／1994／三木晴男／近代文芸社■日本軽種馬協会40年史／1995／社団法人日本軽種馬協会■馬の表情／1996／関直之助／博品社■競馬ハンドブック／1997／鈴木和幸／池田書店■競馬歴史新聞／1998／日本文芸社■浮世絵明治の競馬／1998／折橋俊英／小学館■成田市統計書平成10年版／1999／成田市市長公室企画課■富国強馬／1999／武市銀治郎／講談社